

## 論文の内容の要旨

論文題目

岡熊臣の研究

— 幕末国学者の兵制論と「淫祀」観 —

氏名

張憲生

本研究は、主に幕末の津和野藩国学者の岡熊臣<sup>おかくまおみ</sup>の思想と実践を取り上げて考察する。その目的は、近世国学の復古思想の流れを汲んで思想を形成した彼について近世後期という時代背景の下でその思想形成の過程を分析し、その思想の独自性に光を当てて構造的に検討することである。

本研究の独創性は主に以下の点にある。第一点は、現在知りうる資料を取り上げて整理を加え、彼の思想形成のプロセスを明らかにすることである。第一章における「焚詩」と「改名」事件についての分析および青年期から中年期までの旅についての分析などがこの部分に当たる。第二点は、第二章から第四章にかけて、いままで正面から取り上げられなかった『兵制新書』に内在する構造を解明することである。彼の政治改革論に関する考察や、また荻生徂徠を媒介にして中国明代の兵学思想を取り入れた兵制論に関する考察は、岡熊臣研究に新しい認識を加えることになる。第三点は、第五章でいわゆる「淫祀」論争を通して彼の宗教観の特徴を明らかにすることである。最後に、第四点は第六章で扱う彼の晩年の実践活動である。とくに天保六年に起きた「廃学」事件についての分析は、彼が津和野藩学に参画する前の状況を解明し、幕末に生きた一郷村知識人が政治に参画してゆく道筋を明らかにすることにつながる。

本稿の第一章および第六章が人物研究の基本を構成する伝記事実の実証的研究である。第一章では「家格」はキーワードとなっている。岡家の「家格」とは、一つは中世の土着武士の家であり、もう一つは神官をとする岡家の「大官司」号であるが、両方とも時代の変遷の中で失われた。近世後期に高まった「復古」の潮流の中で、彼は岡家の失われた家格を取り戻そうとして、青年時代から晩年まで活動し続けた。まず「大官司」号の復旧は

青年時代より中年までに数度にわたって行われた吉田家への嘆願によって実現した。一方、「武」の家格を取り戻す情念に駆り立てられて兵学の研究に没頭してゆき、これが後に大著『兵制新書』に結実してゆく。そして津和野藩学に参画した最晩年に認めた遺書においても彼が岡家に「武」の家格を与えるよう津和野藩主へ嘆願した。「家格」の復旧願望は岡熊臣の思想形成に重要な影響を与え、その後の著作活動や晩年の藩学参画を支える深い動機であり、彼の思想と実践を解く鍵でもあったのである。

次に、青年期に行われた江戸遊学をはじめとする一連の旅を検討し、国学への転回など彼の精神内面に刻んだ軌跡を跡づけてみる。この時代の多くの知識人と同じように、岡熊臣もまず家学の薫陶を受けながら、そして時代の流れの中で自らの進む道を見つけてゆく。その中、旅と遊学は彼の思想形成に決定的な影響を与えた。とくに青年時代の江戸遊学は彼の国学への転回のきっかけとなり、その後に「焚詩」と「改名」といった象徴的な事件につながった。文化から文政年間にかけての京都への旅は岡家の「大宮司号」復旧をねらいとするものであった。またその間にある平田篤胤への入門一件も注目すべき動きである。彼の旅と遊学を再現することによって、近世後期に生きた一知識人が体験した思想形成のプロセスを再現することができる。

他方、岡熊臣の思想形成や著述活動を育んだ岡家の学問伝統や蔵書を明らかにすることは第一章のもう一つの目的である。岡家代々に蓄積されてきた学問の伝統と蔵書は彼の教養の基礎を作り、彼の思想形成を大きく影響した。また蔵書と読書リストを見ると、彼の渉獵範囲はけっして復古神道だけに限られなかったことが分かる。とくに『兵制新書』を著述する中年以後、徂徠の政治論や武士土着論にも興味を積極的に吸収した。また、兵学の思索を深めるにつれ、徂徠を媒介に中国明代の兵学にも注目しはじめた。岡家の蔵書と彼の読書リストを点検すると、彼の多様な思想的営為を可能にした思想の源が明らかにすることができる。また広い読書を可能にした近世後期の知識人ネットワークや、多彩な著述活動を支えた社会環境を理解可能なものに一步近づけることができたと思われる。

第二章では『兵制新書』の成立背景と著述動機を考え、その上『兵制新書』に内在する構造を分析した。岡熊臣は青年期から兵学の諸流派を渉獵していた。これが後に『兵制新書』を著述する端緒となったのだが、その上、荻生徂徠の『鈴録』や、『鈴録』を媒介にして学んだ中国明代の將軍戚繼光の『練兵実記』などの影響は無視できない。そして『兵制新書』の著述動機を考えると、『鈴録』などに現れた、先祖の武威を憧憬する兵学者徂徠の影響もはっきり見て取れる。『兵制新書』は宣長の古道学や徂徠の武士土着論に中国兵学を混合させた政治の書であり、兵制論はただ彼の政治論に従属する内容の一部だった。『兵制新書』の各巻に付けられた「幽」と「顯」、「正」と「奇」という巻名には彼の関心の所在が反映されている。「惣篇目」の分析によって、失われた「正の巻」と「奇の巻」の内容をある程度伺い知ることができる。

『兵制新書』の構造分析を踏まえて第三章に展開された彼の政治思想の再構成を試みた。第三章における最も重要な内容は、岡熊臣が『兵制新書』において最も力を入れた幕末郷村社会の秩序再建に関する議論である。彼によれば、商品経済の普及につれて郷村社会が浸食される。また庄屋勢力の跋扈によって土地兼併が進み、本百姓が没落してゆき、郷村社会の衰退を加速させる。この衰退の循環を食い止めるために、郷村社会の制度改革が提起され、詳細な改革案が提示されている。郷村社会の改革に関する議論と平行して、「万

民」——天皇に対する臣と民——の取るべき倫理態度と姿勢が論じられている。また、後期国学における被治者論に様々な思想要素が混淆されて「再語り」されてゆき、いわゆる「御依論」に基づいた、治者側に対する戒め論も展開されている。これらの主張を根底から支えたのは、いわゆる古代「封建制」を原型とする「制度」に関する彼の思考がある。岡熊臣の描いた古代「封建制」の下では、古代中国の中央集権的な「郡県制」と違って、分封制が敷かれ、官吏体制もなければ煩瑣な法令もない。そこには貨幣経済による広域的な商品交易のかわりに、各分国の国内にとどまった、有無相通じて日用を満たす交易と自然経済が存在するだけである。人民に課す租税は百分の一にも足らいために、米が天下にあり溢れて人民が夥しく増えて天下に充滿しているという。ただ古代「封建制」への強い憧憬と仰望は必ずしも幕府の政治を否定する結論につながらなかった。彼が提示した改革構想は基本的に藩あるいは幕府の主導を前提にしていたことや、「国郡境界」論にも見るように、部分的な改良策が目立つ。「制度」に対する関心自体には徂徠の政治論の影響が少なからず見出せるが、古代社会に関する記録から古代「封建制」を復元してこれを「復古」の青写真にしようといった点において同時代の他の国学者と一線を画して、彼の特徴が明らかに見て取れる。

『兵制新書』における兵制論の検討が本稿に課すもう一つの重要な課題である。近世の兵学に関する研究が少ない中、近年に見る幾つかの優れた研究に学びながら、兵制論を読み解く糸口を幾つか掴み、本稿の第四章で一つの解説を試みたわけである。「神」と「武」が一体だった古代天皇制の下での軍制は岡熊臣が兵制を語る時の出発点であり、この軍制の再建は彼の掲げた目標でもあった。彼によれば、天皇の号令で反逆を討伐する「公戦」しかなかった古代を経て、武士たちによる「私戦」の中世へと突入したが、近世に入ってようやく始原の状態に立ち戻りえたという。他方、軍制の変化にもなって戦法が変わり、新しい武器も登場してきたという認識から、彼は徂徠の『鈴録』に学び、中国明代の兵学を止揚して取り入れようとした。ただし、明代兵学の受容に際して彼は明代兵学における「整齐の陣」や「選兵の法」などを積極的に吸収しようという姿勢を示しながら、他方、「古道学」に固執して文化ナショナリズムの立場から中国兵学を排撃するというジレンマに陥っていた。

岡熊臣の構想した兵制は、天皇主導の政治の下に置かれる国民皆兵的な性格を有するものであり、「節制」を重視した徂徠の兵学や、明代のシステムチックな軍隊統制論もそれを補強する技術論として取り入れられいった。ただ、選兵の法を語る際に、彼は既成の武士階級を念頭に置かず、また身分制に囚われずに農民や町人を含む広範な階層から選兵して新たに軍隊を組織する構想を打ち出した。この構想には近世の身分制を打破し、後の「王政一新」にもつながる契機が含まれていたことはとくに強調すべき点である。

第五章では天保の末から弘化初頭にかけて岡熊臣が行なった「淫祀論」批判に焦点を当てて、民俗信仰と吉田神道への態度を考察する。岡熊臣の目的は「延喜式」や「御根帳」に漏れた歴史の浅い小社を「淫祀」解除から守ることであった。しかし、同じく神職を守る目的から、彼は民俗信仰に対して統制を強めるべきだと主張した。他方、彼は「神仏混淆」と攻撃された吉田神道を必死に弁護する態度を見せた。これらの矛盾した現象の根源を探ってゆくと、近世後期における下級神職が吉田家を権威にして自らの地位の維持と向上を図ろうとした背景を見出すことができる。「淫祀」批判に関わった登場人物たちの複

雑に交錯した態度の分析も第五章を構成する一部である。これは、「淫祀」批判がただ国学と儒学の対立という単純な構図では説明し切れないことを物語っている。天保改革を機に動き出した政治変動が徐々に社会や宗教にも影響を及ぼした中、登場人物たちは様々な思想を動員して思索を展開し、各自の立場から「淫祀」に対する態度を表明し、藩主の諮問への答えを通じて自らの思想を藩政に影響を及ぼしてゆくことも注目すべき点である。

第六章はいわば岡熊臣に関する伝記研究の後編に当たる部分である。この部分では、天保六年に起きた「廃学」事件から津和野藩学の参画や死去までの経緯を整理しながら、時代背景を考察する。過去の研究では、一神官としてそこに辿り着くまでの経緯は必ずしも明らかにされていなかった。第六章の考察はこの空白を埋め、近世後期に生きた一民間知識人が政治に関わっていくプロセスを解明する一実例を提供したことになると思われる。

岡熊臣は青年時代から宣長の影響を強く受けたが、後に宣長と異なる思想の独自性もしだいに打ち出していった。中年期の文化から文政年間にかけて篤胤の思想に傾倒した一時期があり、「幽冥」論と「死後安心論」を提唱し、民俗信仰に立脚した言説を生み出して国学的「コスモロジー」の構築への関心が強まった。だが、その後しだいに篤胤から離れてゆき、とくに晩年になると、むしろ篤胤への批判を強めた傾向さえ見られる。『兵制新書』を著述する段階から、徂徠の影響が明らかに現れて、「制度」に関する思考が岡熊臣の取り組む中心課題となり、政治と兵制などの具体的な構想として打ち出されいった。晩年に「淫祀」解除に反対する態度を示しながら、一部民俗的信仰に対する統制論を提唱した。このときから、後の藩学参画を予告する実践面での行動が目立ちはじめ、津和野藩の藩学改革にもなって藩学へ参画する道が開かれた。

『兵制新書』で提示された政治思想と兵学思想や、それをもとに描かれた秩序像や世界像を近世後期の政治状況に照らしてみると、明らかに一種のズレが生じている。このズレは三谷博が指摘した近世後期に見られる「実際の制度や慣習からズレた規範的秩序像の登場」の中より生まれたものだと見ることができる。国学の「ズレた規範的秩序像」が近世後期の政治変動に果たした機能について三谷は次のように指摘している。

明治維新の前、一九世紀前半の日本には現存秩序を否定し、破壊しようとする教義は事実上存在しなかった。大塩平八郎は稀有の例外である。しかし、国学の新しい秩序像は権力による規制を受けずに流布し、面と向かつての体制へ挑戦と同じ機能を果たすことになる[三谷博：1997]。

岡熊臣の描いた秩序像は内容から見ると、近似する性格を有しているということができる。彼の思想には相背反する二つの側面が内在していた。彼の近期構想では、現存の秩序を否定するどころか、むしろいかにして既成の政治秩序の建て直しが可能かが中心課題となっていたが、しかし長期構想では、「制度」に関する新しい秩序像が提示され、そこには客観的に現存の体制に挑戦する契機が内包されていたということができる。

過去の国学史や神道史の枠に囚われぬことが筆者の持つ方法意識であり、本研究はすなわちそういった考え方に基づいた試みの一つである。岡熊臣の国学との関連に目を配りながら、同時に彼の非「国学」的な側面にも光を当てることが重要だと考えている。この方法的課題に対する探求は今後も続けなければならない。